金正恩逸話集

金正恩逸話集

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
チュチェ113(2024)

はしがき

社会主義全面的建設の新たな転機が開かれ、理想と夢が一つ一つ素晴らしい現実となっている今日、朝鮮人民は敬愛する金正恩(キムジョンウン)総書記を限りなく尊敬し、仰ぎ慕っている。

人民大衆第一主義を畢生の理念とした金正恩総書記は、ひたすら人民に奉仕することにすべての思索と活動を指向させ、人民のために尽くすことに喜びと幸福を求めている。

「人民を限りなく愛する指導者」「人民のためなら千万金をも惜しまない方」「人民のためなら苦労も楽とする方」、これが金正恩総書記に対する国際社会の一致した評価である。

金正恩総書記は今日も、人民の理想を実現するために絶え間ない現地指導の道を歩み続けている。

本編集部は、金正恩総書記が現地指導の日々に残した人民愛の逸話の一部をまとめて『金正恩逸話集』を刊行することにした。

目　次

気高い忠誠の世界

朝早く訪れた理由

2009年8月のある日の早朝、商店の外で乗用車の止まる音が聞こえた。普通江（ポトンガン）商店の女性責任幹部が出て見ると、意外にも金正恩総書記が車から降り立つところであった。

その女性責任幹部は総書記にお辞儀をした。

総書記は女性責任幹部の挨拶に応えて、昨日金正日（キムジョンイル）同志が商店を視察した際にどんな教示を残したのか知りたくて来たと言った。

女性責任幹部の案内を受けて1階の果物売り場の前で包装されたまま陳列されているリンゴを見た総書記は、随員たちを振り向き、外国ではリンゴの包装をどう行っているか確かめてみるほうがいいと言った。

さまざまの果物の陳列場と売り場をいちいち見て回った総書記は、誰もが気にも止めずに通り過ぎている玄関ホールの蛍光灯の照度が弱いと指摘し、商店に荷物運搬用エレベーターはあるのかと尋ねた。

荷物運搬用エレベーターはあるという女性責任幹部の返答に総書記は、階段を上がりながら、商店に客用のエ

レベーターがないと客が2袋、3袋と商品の入った袋を下げて階段を上り下りすることになるが、それでは困るではないか、と言った。

総書記は2階の肉類売り場で、買い物客が覚えるであろう不便についても細かく指摘した。

いろいろな肉類や肉の加工品に注意を向けた総書記は、七面鳥1羽の重さは何キロほどになるかと尋ね、5キロから14キロほどになるという答えに、そんなに大きく重い七面鳥をどのように下げて歩くのか、米袋のようにこう担いで歩くわけにもいかないだろうにと言って、背に担ぐしぐさをした。

関係幹部たちはその身振りに思わず吹き出したが、それは束の間で、恥ずかしい思いがし、頭を垂れた。

商店では商品を売りさえすればよいと考えるだけで、客が商品をどう持ち歩くのだろうかということにまでは注意を向けていなかったからである。

女性責任幹部は前日、商店を視察した金正日国防委員長から受けた注意を改めて思い起こした。

国防委員長は、年寄りの場合商品を買って階段を歩くのは骨の折れることだ、商店に階段しかないのは人民性に欠けた表現だと指摘していたのである。

女性責任幹部は、総書記がどうして朝早くからわざわ

ざこの商店にやって来たのか、その訳を知った。

女性責任幹部は、商店を後にする際もやがて設置すべきエレベーターについて今一度言及し、早く商店にエレベーターを設けて買い物客の便宜を図らなければとねんごろに話す金正恩総書記を仰ぎ見ながら、一時も早く実行しようと決心した。

哀悼期間に供給された魚

金正日国防委員長が急逝した日の翌2011年12月18日、幹部たちは、国防委員長の恩情こもる措置によって出漁していた漁船が12月16日夕、朝鮮東海岸のある港に帰港したとの報に接した。

国防委員長の急逝でなすべきことが山積みしている金正恩総書記にこのことを報告することは控えるべきではないかと一時は躊躇したものの、国防委員長の愛情がこもるこの魚について報告を伏せておくわけにはいかないと思い返した。

いつだったか平壌(ピョンヤン)市民にスケトウダラやニシンを供給するようにした国防委員長は、新年を間近に控えて平壌市民にスケトウダラとニシンを贈ろうとして、逝去する

1日前の12月16日夜9時13分、平壌市民のための魚類供給案にサインをしていたのである。これは国防委員長の生涯における最後の署名文書であった。

悲痛な面持ちで語る関係幹部の報告を受けて、耐えがたい喪失の痛みの中でも、人民への国防委員長の恩情を今更のように痛感した金正恩総書記は、金正日同志が親しく配慮した掛け替えのない愛の贈り物を人民に一時も早く行き渡らせるべきだとして、特別列車を動員して魚を平壌まで集中輸送するよう具体的な対策を立てた。

全国が民族の最大の痛恨事で悲しみに沈んでいた時、思いもよらぬ鮮魚の供給を受けることになった首都の市民たちは、感激の涙を流した。

実に金正恩総書記の恩愛により、人民は哀悼期間に新鮮な魚を供給されるという伝説のような情景が繰り広げられたのである。

母親の心情、母親のような手配りで

金正日国防委員長の不慮の急逝で全国が深い悲哀に沈んでいた2011年12月の一日一日が流れていた。

国防委員長の逝去を天も悲しみ、むせび泣いているの

か大雪がこんこんと降りしきった。

けれども、弔意式場を訪れた無数の人々は寒さも積雪も意識せず、国防委員長の霊を慰めんものと夜を徹して号泣した。

金正恩総書記は、酷寒の夜、雪に打たれながらも通夜をする人たちが凍傷にかかるようなことがあってはと、必要な対策を手落ちなく立てるよう幾度となく強調した。

そして、野外の弔意式場を訪れる人たちや通夜をする人たちが防寒帽やマフラー、手袋、耳覆いを着用して、弔意を表する時にだけ脱ぐようにし、応急手当ての対策も立て、弔意式場周辺には体を温める場所を設けるようにと指示した。

ほかにも弔意式場で通夜をする人たちが手足を温める数万個の発熱テープと発熱敷き革を提供し、野生蜂蜜や粉ミルク、パン、菓子など多くの食品も送る配慮をめぐらした。

また、寒い冬の日に弔意式場を訪れる人たちに白湯をもてなすより砂糖湯をもてなせば喜ばれるだろうとして、大量の砂糖を各地の弔意式場に送る措置を講じた。

このように万全の措置を取りながらも気持ちがおさまらず、どうすれば人民の悲哀を軽減できようかと気を配っていた総書記は、関係部門の幹部たちに送る自筆の指示を一字一字心をこめて書いた。

「今日のこの心の痛みを癒す上で市党委員会の任務はきわめて重要です。

平壌市党委員会の幹部たちは首都市民の真の奉仕者、人民の忠僕としての自覚と正しい観点を持って市民たちの便益を図る活動に力を注がなければなりません。

そして母親の心情、母親のような手配りで首都市民の心痛を慰めてあげるよう願います。

金　正　恩

2011．12．25」

母親の心情、母親のような手配りで……。

真に、金正恩総書記は人民の心の痛みと悲しみを慈父の愛で慰め、母親のような手配りでいたわりながら、民族の痛恨事という厳しい試練の日々を乗り越えていった。

謝　絶

2012年2月のある日、金正恩総書記は金正日国防委員長の深い愛情がこもる新居に移って生活を始めた慈江道満浦（チャガン、マン、ポ）市の人民から送られてきた手紙を読んだ。

「……夢にもお会いしたい敬愛する金正恩同志。

父なる金正日将軍と敬愛する金正恩同志の大海のよ

うな深い恩情で、鴨緑江(アムロク)のほとりに新築なった245世帯の立派な住宅への入居集会に参加した満浦市民は、限りなく慈しみ深いその恩愛にこみ上げる感激を抑えることができず、謹んでこの手紙をお送り致します。

……」

金正日国防委員長は生前、満浦市は社会主義の本態が生きており、すべての面で全国の模範だとして、繰り返し訪れては市を朝鮮の国境都市にふさわしく立派に整備するようにし、金正恩総書記も満浦市民のためにいろいろと恩情こもる措置を講じた。そうした中で、鴨緑江のほとりに近代的な新住宅が建てられて満浦市民たちが入居する運びとなったのである。

金正日国防委員長と金正恩総書記の大いなる恩情と信頼に励まされて、昨年の営農でも穀物の生産計画を超過遂行し、豊年を迎えることができたとして、手紙は次のように続けていた。

「……

この国境都市は従前の面影を一新し、豊年も続いて、市民の生活が見違えるほど向上した今、金正日将軍への慕情はつのるばかりです。

生涯人民のために献身された金正日将軍に温かい食事を一度としてもてなすことができなかった罪の多い満

浦市民は、将軍への切々とした慕情を持って昨年取り入れた白米の中から一粒一粒選りすぐって100トンを用意し、50キロずつ丁寧に包装致しました。

金正日将軍への慕情と信念の誓いをこめて用意した白米100トンを、将軍の銅像の建立事業に寄贈することで人民の道義を多少なりとも果たしたいという私たちの素朴な真情を、敬愛する金正恩同志が是非お受け取りになって下さるよう切にお願い申し上げます。……」

新しい住宅を提供して下さった金正日国防委員長と金正恩総書記の大いなる恩恵に少しでも報いる一念で真心こめて用意した100トンの白米。

この世の果てまで金正恩総書記に従おうとする満浦市民の白玉のような忠誠の念がこもっている白米であった。

手紙を読んだ総書記は、満浦市民に対する愛と信頼のこもった意義深い自筆の返書を送った。

「慈江道党責任書記、満浦市党責任書記！

金正日同志の愛によって建てられた新居に移った満浦市民たちが喜んだということですが、私はこの消息を本当に嬉しく読みました。今後、道党と満浦市党の活動家たちは、金正日同志の温かい恩情が新築の住宅と共にいつまでも伝えられるようにすべきであり、常に人民の生活上の問題、隘路に細心の配慮を寄せて即時解決

し、人民の利益を最優先してすべての活動を進めることで、わが党の人民的施策が金正日同志の尊名と共にとこしえに花咲いていくようにすべきです。満浦市が金正日同志の銅像の建立に参加している軍人たちに、心をこめて一粒一粒選りすぐって用意した白米100トンを送りたいということですが、その誠意に感謝します。

本当に嬉しく思います。しかし、この問題は誠意のみを受けて謝絶します。領袖と血縁的な関係を保持しているわが人民が領袖にささげるこの白玉のような心は、私が金正日同志にその通り報告します。

私は道党と市党の活動家たちが、人民の利益と幸福のために生涯のすべてをささげた金正日同志の人民愛の崇高な志を体して、彼らが申し出た白玉のような白米を、金正日同志の恩愛として市内の人民と子どもたちにそのまま贈ってもらえたらと思います。

必ずそうして下さい。

満浦市民の手紙を読んで本当に力が湧き、一層奮発して革命に尽くさなければという決心が固くなります。

金　正　恩

2012．2．14」

金正恩総書記の返書に満浦市民は、こみ上げる感激を抑え切れずにいた。

将軍型の人間

記念写真に秘められた話

引き返してきた訳

2010年5月のある日のことである。

金正恩総書記は、人民武力部の贈物保存館（当時）を訪れた。

総書記は、長時間にわたって人民軍軍人たちの至誠がこもる展示品に一つ一つ目を通し、ささいな損傷もなく大事に保存するよう指示した。

その時、総書記に贈呈品の解説を行った女性講師は、金日成（キムイルソン）主席と金正日国防委員長の視察時にもそのつど解説を行った古参の講師で、当時は館長を務めていた。

ここで館長が間もなく還暦を迎えることになったという報告を受けた総書記は、誕生日はいつか、何年軍服を着ているのかと尋ね、元気な体でこれからもずっと軍服を脱がずに職務に励むようにと重ねて激励した。

総書記を見送りながら彼女は、金日成主席と金正日国防委員長が来館した際と同様、金正恩総書記と並んで記念写真を撮れたらと切々と願いながらも、あえて口

には出せなかった。
　彼女は総書記の安寧を祈りながら遠ざかる乗用車を見送っていた。
　ところがどうした訳か、車が急にUターンし、再び贈物保存館の方へ戻ってくるのである。
　あわてて駆け出す彼女の前で車は止まり、中から早く車に乗るようにという声がした。
　「館長と一緒に写真を撮れなかったことが気になって引き返してきました」
　彼女は驚き、わが耳を疑った。
　平凡な一戦士の胸の奥の願望を察し、再び引き返してきた総書記の熱い愛は、彼女の胸を激しく揺さぶった。
　総書記は感激にむせぶ彼女に向かって、金正日同志が館長と一緒に写真を撮った際の同じ贈物を背景にして一枚撮ろうと、場所を指定した。
　兵士たちのためとあらば険悪な道、ぬかるみの道が千万里続いても欣然として歩む金正恩総書記の温かい愛に包まれて、老講師は感激に涙し、笑いもしながら光栄の記念写真を撮った。

指切りもして

　2011年8月のある日、金正恩総書記は再び人民武力部

の贈物保存館を訪れた。

この日も長時間をかけて展示室を見て歩いた総書記の疲労をいささかなりとも癒すことができればと、人民武力部革命事績館の講師を務めていた贈物保存館館長の娘が一曲の歌をうたった。

歌『一気に』を聞いた総書記は、「歌が上手だ。さっき贈物を見て歩く時、館長も歌をうたったが、母と娘が負けず劣らず歌が上手だ」と称えた。

そして、音楽教育はどこで受けたのか、金日成同志の臨席を得てステージに立ったということだが、最初に出演したのは幾つの時だったのか、などといちいち尋ね、歌をもっとうたうようにと言った。

一曲一曲と彼女の歌に拍手を送った総書記は、母親の後を継いで白頭（ペクトゥ）山将軍たちの指導業績を解説し宣伝することに一生をささげたいという決意を聞いて、実に殊勝な心掛けだと称えた。

総書記は、記念写真を撮っていただければという母娘の切願を察して、今日はカメラを持って来なかったので撮れないが、次の機会にはきっと撮ろうと言った。

そして娘に近づき、「私と約束しよう。約束は指切りをしないと本物になれない」として娘と指切りをし、「親指の『はんこ』まで押さないことにはね」と

言って、彼女の親指に自身の親指を当てて朗らかに笑った。

女性の身で軍服を着用し、革命事績部門で一生涯を送る母親とその娘の決意が頼もしくて、総書記はこのような愛の約束を交わしたのであった。

講師の感嘆

2010年9月、金正恩総書記が祖国解放戦争勝利記念館を訪れた時のことである。

総書記が祖国解放戦争第1段階館第2室に入ると、講師は展示されている戦車についての説明を始めた。

この戦車は敵の牙城に一番乗りした第312号戦車で、わが人民軍は1950年6月28日早朝5時に総攻撃を開始して2万1000余の敵兵を殺傷・捕虜にし、11時30分には勝利のうちに作戦を締めくくったことなどなど……。

講師の解説が終わると、総書記は戦車を指して言った。

「今朝早くこの戦車の写真を見ました。なんという戦車ですか」

「『T—34』です」

「この戦車の砲の口径は何ミリですか」

「76ミリです」

講師はすぐに答えた。

じっと戦車に目を凝らしていた総書記は、かぶりを振った。

「いやそうじゃない。『T—34』は砲身が長いものと短いものがあって、砲身の短いものは口径が76ミリで、長いものは85ミリです。この戦車の砲身は長いので口径は85ミリのはずです」

「えっ?!」

講師は驚いた。驚いたのは当然で、それまで第312号戦車の砲の口径は76ミリとされており、数十年間、大勢の武力装備部門の専門家が参観していながらも、そのことに疑問をはさんだ人はいなかったのである。

怪訝な面持ちで立っている講師に、総書記は言った。

「後でこの戦車砲の口径を計ってみなさい」

「分かりました」

講師は功勲兵器館でまた驚かされた。

功勲兵器館に展示された兵器や戦闘技術機材をいちいち見て歩いた総書記が、「民青」号自動砲の前で歩みを止めた。

「ここに自動砲もありますね。この砲の口径は何ミリですか」

「76ミリです」

「じゃ、この砲は『ス―76』です。自動砲には『ス―76』と『ス―100』があって、『ス―76』の口径は76ミリ、『ス―100』は100ミリです」

続けて総書記はそのかたわらの「Ｔ―34」戦車第104号を指した。

「この戦車砲の口径は何ミリですか」

「85ミリです」

総書記はうなずいた。

「『Ｔ―34』にはリュックが一つのものと二つのものがあります。リュックが一つの戦車は砲の口径が76ミリであり、リュックが二つのものは85ミリです」

幹部たちと講師は武力装備についてこんなにも精通している総書記の深い知識に感嘆を禁じ得なかった。

総書記は飛行機「ヤク―18」第03号の前に立ってこう言った。

「『ヤク―18』には尾輪式と前輪式がありますが、この飛行機は尾輪式です」

総書記を見送った後、記念館の幹部と講師たちは「Ｔ―34」戦車第312号の砲の口径を計ってみた。それは確かに85ミリであった。

彼らはまたまた感嘆した。

「金正恩同志こそ最新の武力装備ばかりか、在来式

兵器や戦闘技術機材にも精通している武力装備の専門家だ」と。

演奏会を指導して

金正恩総書記はある日、軍楽隊の演奏会を指導した。

演奏家たちは金正恩総書記の前で演奏会を催す喜びにひたりながら、吹奏楽『勝利の閲兵式』『万景台（マンギョンデ）の歌』『銀翼』などを演奏した。

金正恩総書記は、各演奏ごとに拍手を送り、吹奏楽曲のいずれも編曲が優れ、形象も上出来だったと称えた後、軍楽隊長に今度は私が指定する歌を演奏してみるようにと言った。

こうして『沿岸砲兵の歌』が大きな迫力をもって演奏された。

演奏が終わると、金正恩総書記は軍楽隊長に向かって、歌の性格を立派に生かして形象が上手に行われたとしながらも、こう言った。

——ところで、音楽のテンポが少し速いという感じはしませんでしたか。

軍楽隊長は顔を赤らめた。沿岸砲兵たちの敵撃滅の気

概を力強く形象化しようとした余り、テンポが速くなってしまったことには注意が届かなかったのである。

金正恩総書記は「こんなテンポでは沿岸砲兵たちが砲弾をそんなに速く装弾できましょうか。今のテンポは高射砲に適しているでしょう」と言って豪快に笑った。

実にぴったり当てはまる比喩であった。

新年の元旦に

信念と意志の宣言

山河が真白の雪に覆われた2012年の元旦。

金正日国防委員長の逝去直後に迎えた新年の元旦、金正恩総書記は朝鮮人民軍近衛ソウル柳京守(リュギョンス)第105戦車師団を訪れた。

金正日国防委員長を偲んで悲痛な思いに胸を痛め、朝早くから兵営前の道路を見つめていた師団の将兵たちは、国防委員長が残した足跡をたどって金正恩総書記が来られると知るや、頬を涙で濡らしながら歓声を上げて出迎えた。

金正恩総書記は部隊の沿革室を見て回る際、今朝早く錦繡山(クムスサン)記念宮殿（当時）に金正日同志を訪れて新年

の挨拶を述べた時、金正日同志が私に何をしているのか、早く……軍部隊に行ってみるべきじゃないかとおっしゃっているようで、大急ぎでやって来た、と熱い思いをこめて語った。

総書記は、部隊の指揮官たちの案内を受けて部隊の各所を見て歩いた。

寒い戸外とは違って暖房の利いた兵舎や食堂、浴場兼洗面場、戦車訓練場……。

そのいずこにも部隊を幾度となく視察した国防委員長の体臭が漂い、それらの日に残した声がはっきりと聞こえるようであった。

2年前国防委員長に従って歩いたコースをたどって部隊の視察を終えた総書記は、随行の幹部たちに、私が血涙にむせんで迎えた新年の元旦に近衛ソウル柳京守第105戦車師団を訪れたのは、金日成同志と金正日同志の意図を違えずに継いで先軍の旗を揺るぎなく高く掲げ、この地に強盛興隆するチュチェの社会主義を必ず建設せずにはおかないという私の確固とした信念と鉄石の意志を内外に誇示するためである、と力をこめて話した。

金正恩総書記はこのように、金正日国防委員長の指導の足跡が印されている朝鮮人民軍近衛ソウル柳京守第105戦車師団に、チュチェ朝鮮の新たな100年代が始まる

意義深い新年の元旦に現地指導の足跡を残したのである。
それは、チュチェの革命偉業をあくまで達成せんとする信念と誓いの足跡であり、この地に変わることなく流れる領袖偉業継承の輝かしい足跡であった。

関心を払うべき問題

この日、金正恩総書記は、部隊管下一区分隊の兵舎に寄り、室温はいくらかと指揮官に尋ねた。
指揮官はもじもじした。総書記は微笑んで言った。
「寝室の温度がどれほどかは前もって確かめて来たのだから、ごまかそうとはしないでありのままに答えなさい」
随員たちがくすくす笑った。
一幹部が代わって答えた。ここには太陽熱温水器が設けてあるので室温は結構高いようです、と。
しかし総書記はかぶりを振り、兵士たちと生活を共にしている区分隊指揮官たちの返答を聞いてみようと言った。
普段の寝室の温度は15～17度だという答えに、現在の室温はいくらかとまた尋ねた。
「14度です」
区分隊指揮官の率直な答えにうなずいて洗面所に足を運び、水道の栓をひねって、出てくる水に手をつけた。

洗面器に水が一杯、また一杯……と何度も満ちたが、水は依然として冷たかった。総書記は栓を開けたまま温水が出てくるのを待った。

「まだ湯は出てこない。

温水器のセンサーには水温が20度だと表示されていたが、実際の水温はそうではないようだ」

「管中の水が残らず排出されると温水が出てきます。日が差す時は水温が70～90度、時には100度まで上がりもします」

部隊指揮官の説明に、総書記は窓外に目をやり、慎重な面持ちで言った。

「今日は空が曇っているので、水温が上がらないらしい」

部隊指揮官はその言葉にジョークがこもっていると感じながらも、多分水槽の温水を全部使った後、新しく入った水がまだ加熱されていないせいで水温が高くないようですと弁解した。

「それなら、明日の朝もう一度来て水温を計ってみよう」

総書記は朗らかに笑った。随員たちも一斉に吹き出した。

その笑い声を聞きながら指揮官たちは深く考えさせられた。

兵士たちが1月の寒さの中でも暖かい兵舎で温水のお陰を被って生活できるよう、部隊指揮官たちは常に深い関心を払うべきだということを、金正恩総書記はそんな笑いをもって強調したのであった。

自らの車で運んできた花蓮魚

2012年1月某日、ある空軍部隊を視察した金正恩総書記は、歓呼の声を上げる軍人たちに挨拶を送り記念写真を撮った後、航空兵たちの飛行訓練を指導した。

実にうまい、離着陸をはじめ飛行機の操縦術がきわめて高い、大胆に機動していることが分かる、すべての航空兵が吉英祚(キルヨンジョ)英雄の貴い精神を鑑としなければならないと激励した総書記は、すべての航空兵を党と領袖、祖国と人民のために一命をなげうって戦う空の決死隊としてしっかり準備させるうえで必要な問題について一つ一つ具体的に教えた。

航空兵用の食堂を特別な関心を持って見て歩いた総書記は、調理台上の料理を一つ一つ見て、航空兵たちはどんな料理を特に喜んで食べているのか、魚類はどこから提供されるのか、バターの供給は正常になされて

いるのかと尋ねた。

それでも何か気掛かりなことがあるのか、調理台上の料理を再び見回し、航空兵は精神的にも肉体的にも負担が大きいから栄養を十分に取らせなければならない、彼らのためには何物も惜しむべきでない、と真摯な表情で語った。

そのしばらく後、総書記は部隊の指揮官に、車に乗せてきたものを指差して航空兵たちに味を見せるようにと言った。

なんだろうかと思いながらのぞいてみると、そこには初めて見る大きな魚が置かれていた。指揮官たちは目を見張った。あたかも豚をつぶしたかのようなその魚は、重さがゆうに60キロにのぼる花蓮魚という魚であった。

花蓮魚は普通3年以上飼育しても3～4キロにしかならないというのに、とにかく淡水魚の中にこんなにも大きなものがあるとは驚くべきことであった。。

金正恩総書記は指揮官や調理師たちに花蓮魚の調理法を一つ一つ教えた。

やがて食堂に集まった航空兵たちは、にぎにぎしく花蓮魚の料理に舌鼓を打った。

舌鼓を打ちながらも彼らは、初めて食べる特大型の花蓮魚の格別な味もさることながら、この寒い冬の季節にこんなに大きい奴がどうして捕まったのだろうかと不思

議そうに語り合った。

しかし、その珍しい花蓮魚が、金正恩総書記の安寧を願う人民の切々たる心をこめて総書記に贈られた魚だとは誰も知らなかった。

海兵たちと共に過ごした民俗祝日

2012年2月の酷寒のある日、金正恩総書記は一海軍部隊の指揮部を訪れた。この日は正月テボルム（小正月）という民俗祝日であった。

朝早くはるか遠くの山並みを越えて自分たちの陣地を訪れた総書記を迎えた海兵たちは、感激に目頭を熱くして歓呼した。

海兵たちと並んで記念写真を撮った総書記は、部隊の各所を見て歩き、部隊の戦闘準備状況と海兵たちの暮らしぶりについて確かめもした。

お節料理づくりに大童の調理場では、クッス（麺）のたねにはどんなものが使われているのか、クァベギ（ドーナツに似たもの）の材は何か、海兵たちは喜んで食べるのかといちいち尋ねては、料理を上手につくって腹一杯食べさせるようにと繰り返し強調した。

総書記はさらに今一つの部隊を訪れた。

部隊の食堂に入った総書記は、今日は民俗祝日だが、海兵たちにどんな料理を出すことにしているのかと尋ね、いろいろな料理が所狭しと置かれた調理台を笑みを浮かべて見回した。

そして、軍部隊が養殖しているイガイを指して、加工はどのようになされるのかなどと具体的に尋ね、指揮官たるものは常に、給養活動は即ち政治活動であると強調していた金日成同志と金正日同志の教示を忘れず、兵士たちの食生活を一層豊かにするべく努めることだと指摘した。

全国が楽しく休息している民俗祝日にも前線の視察を行い、軍人たちの生活を深く気遣う金正恩総書記の恩情に、海兵たちは、われわれの最高司令官は常に兵士と共におられる、最高司令官はわれら全将兵の慈父である、とただただ感激した。

額のひとすじの小皺を見ても

肌寒い冷気が漂う早朝、金正恩総書記は朝鮮東海の前方陣地麗島(リョド)防御隊を視察した。

総書記は兵舎や調理場その他を視察し、几帳面な部隊

管理と行き届いた生活文化に大いに満足した。

中でも特に気に入ったのは、「兵士のために奉仕する！」というスローガンが掲げられている厚生施設「兵士院」と各種の副食物が一杯に積み上げられている一日分貯蔵庫、無熱源ビニールハウスであった。

総書記は、ビニールハウスの中では、本当にあなたたち自身の手で建設したのかと尋ね、盛り沢山の食卓を見回しては、私が来るということをどう知ってこんなに大きな膳立てをしたのかと言って微笑みもした。

総書記の問いに、部隊長は、軍人たちに日常供給しているものと変わりはありません、すべて当部隊の温室でつくったものです、と説明した。総書記は、今朝食事を取るゆとりはなかったが、空腹感はまるでない、こうして部隊内をいちいち見て回ると、諸君が本当に良心的に働いていることが分かると言った。

そして、部隊長の額に刻まれた小皺に目を止めて、母親の皺そのものだ、あなたはわが子の立派な成長を願ってどんな苦労にも耐える母親の気持ちで働いた、私は今日ここに来て良心的な指揮官に会えたことが一番嬉しい、と述べた。

また、部隊長がこの島で数十年間、戦闘準備と軍人の生活を改善すべく献身していることに感謝するとし、

あなたは70歳まで部隊長を務め、立派な指揮官を養成して彼らにバトンタッチした後は十年間私と一緒に働く覚悟をすべきだ、私はあなたのような人物を必要としている、と言った。

平凡な指揮官の額のひとすじの小皺を見て、生活条件の不利な島の陣地で軍人たちの生活を改善すべく、長年努力してきた彼の陰の献身と努力を見て取り、高く評価する金正恩総書記であった。

兵士たちを誰よりも深く愛する金正恩総書記の薫陶を得て、その愛兵精神を体現した指揮官たちが育ち、全軍の同志的団結が一層強固になり、朝鮮人民軍は金正恩総書記と志と情を共にする一心の大軍団に一段と揺るぎなく準備されているのである。

板門店にて

板門店（パンムンジョム）を視察していた金正恩総書記は、あたかも散歩をしているかのように軽い足取りでさっさと板門閣のバルコニーに上った。

随行した人民軍の指揮メンバーや板門店を守る軍部隊の指揮官たちは極度に緊張し、手に汗を握っていた。

危険極まる場所で一身の安全を顧みない総書記を幾重にも囲み、わずか数十メートル先の敵側の動きに目を配った。

そうした一触即発の危機の中でも総書記は余裕綽々として、どうして敵兵の姿が見えないのかと言って笑った。

この日、総書記は板門店の各所を見て歩き、幹部たちに記念写真を撮ることにしよう、板門店会議場区域で警戒勤務についている警務官たちも呼んで一緒に写真を撮りたいから、彼らを全員撤収させるのだ、と言った。

「分かり……」

こう元気よく口を開きかけた部隊指揮官はあっと思って口をつぐんだ。

脳裏にひらめいたこのような思いで指揮官は、現在勤務中の軍人たちとは第2次の撮影で撮っていただけないでしょうかと進言した。

しかし総書記はきっぱりと言った。

「心配しなくてもよろしい。最高司令官が出てきたのに誰があえて攻撃をかけて来れようか。今日は最高司令官が板門店を守るから、いらぬ心配はせず勤務中の警務官を残らず呼んできなさい」

軍人たちは栄光のこの瞬間をどう見送られようかと感激で胸をはずませ、目に涙をたたえながら走ってきた。

金正恩総書記は、「万歳！」の歓声も上げられず、

身に余る光栄に浴して胸をときめかせている彼ら一人ひとりの手を取り、光栄の記念写真を撮った。

情勢が極度に先鋭化していた3月初旬のこの日、敵兵が目と鼻の先で蠢動している板門店で軍人たちと並んで撮った記念写真は、金正恩総書記の無比の胆力と気概を世界に今一度誇示し、敵を恐怖と不安におののかせた。

椒島での一日

金正日国防委員長が逆巻く激浪をついて椒(チョ)島の兵士たちを訪ねた話は、すでに世に広く知られている。

その日から椒島は、金正日国防委員長が歩んだ社会主義防衛戦の道がどれほど厳しくて苦難に満ちたものかを物語る歴史の証言者として世人の注目を浴びるようになった。

2012年3月、金正恩総書記は朝鮮西海岸の前方陣地である椒島を視察した。

荒波をついて

この日の海上の天気もやはり、金正日国防委員長が椒島を訪れたその日と変わらず非常に荒れていた。

海軍部隊の指揮官たちは、厚い氷板が海上に浮かんでいて、やむを得ない場合でなくては船を運航しない時だと言った。

しばらくの間荒れている海面に目をやっていた金正恩総書記は、今日はいつにも増して波が高いようだと言った。

そして、今この艦に乗って椒島へ向かっていると、1996年11月、逆巻く荒波をものともせず椒島の防御隊を視察した金正日同志のことが思い出されてならない、その日、波がなんと高かったか、金正日同志は生前そのことをしばしば口にしておられた、と静かに言った。

総書記が椒島に着くと、軍人たちは感激に胸をときめかせ、涙で頬を濡らしながら万歳の歓呼の声を上げた。

軍人たちに手を振って答えた総書記は、ここにある一部隊も見て回ろうと言った。

たとえ現地視察の日程は詰まっていても、椒島の軍人たちにみんな会いたいと思っていたのである。

金正恩総書記は、元来島に住む人々は人里離れた寂しい所で生活しているため、陸地から来た人々を見ただけでも喜ぶ、軍隊服務のときには同郷人に会っても喜ぶのだが、最高司令官がここまで来て自分たちの部隊に寄らずに帰ったと知ったらどんなに残念に思うだろうかと言い、その部隊に足を運んで軍人たちと共に記念写真を撮った。

軍人家族と共に

記念撮影が終わり、金正恩総書記が部隊を見て歩いていたときのことであった。

突然、周辺の小山の上から「万歳！」を叫ぶ歓呼の声が上がった。

総書記が来られたという話を聞いて駆けつけてきた部隊の軍人家族であった。

彼らを見た総書記は、あの山の上でも軍人家族が私を見て万歳を叫んでいる、最高司令官を懐かしんで熱烈に歓呼する軍人家族の姿を見ると、現地視察の道がいくら忙しくても、このまま帰るわけにはいかないとし、彼らに向かって早く下りてくるようにと手を振った。

総書記の現地視察の話に余りにも嬉しくて普段着で急いで駆けつけてきた軍人家族は、自分たちの身なりに気がついてそのまま一斉に立ちすくんでしまった。しかし、それも一瞬のことであった。

早く来いと自分たちに手招きする金正恩総書記の姿を見ては、山の傾斜を一目散に走ってきて総書記を取り囲んだ。

そして感激にむせびながら、総書記と共に記念写真を撮った。

水と空気さえあれば

2012年10月のある日、金正恩総書記は平壌市内にある諸公園の改造工事に当たっている人民軍部隊の指揮官たちを呼んだ。

そして、人民軍が合掌江(ハプチャン)と普通江(ポトン)の整備工事を短時日で仕上げ、続けて平壌市内諸公園の改造工事に取り組んでいるが、軍人たちは人民にささいな迷惑もかけずに工事を最短期間に質的に終えるようにと指示し、こう述べた。

「つねづね強調していることですが、人民軍は人民のための工事をしていても人民に絶対に支援を求めたり、負担をかけたりしてはなりません。一口に言って、その地域に水と空気さえあればそれで済むという考えを持たなければなりません。そう考えないようならば人民の軍隊ではありません」

水と空気さえあれば！

人民軍の活動を指導した初期から総書記は、終始この問題を強調してきた。

1年前、2・8ビナロン連合企業所給水沈殿池の沈殿物をさらい出す膨大な難工事を指揮した際も、工事に当た

る人民軍が周辺地域の住民にささいな迷惑もかけてはならないと何度も強調していたものである。

総書記は一同を見回し、人民軍に合掌江と普通江の整備工事をはじめ、平壌市内の諸公園の改造工事を担当させたのは、人民軍が人民に有益なことを少しでも多くし、人民の軍隊としての本然の姿をはっきりと見せることで、軍民大団結を一段と強化することに重要な目的があると話した。

人民生活の向上をめざす誇らしい事業の先頭に軍隊を立たせながらも、人民にはささいな負担もかけるべきでないと強調するその言葉には、朝鮮の社会の貴重な根元である軍民大団結を一段と強化することによって、社会主義強国づくりの最終的勝利を早めて行こうという崇高な意図がこもっていた。

実に金日成主席が創始し、金正日国防委員長によって強化され、今日は金正恩総書記の努力により一枚岩のように固められていく軍民大団結があるがゆえに、朝鮮革命は昨日もそして今日も勝利の一路をまっしぐらに前進しているのである。

兵士のために指揮官がいる

2013年3月、金正恩総書記は人民軍のある区分隊を視察した。

区分隊の各所を見て歩き、軍人たちの生活を確かめていた総書記が調理場に入った時のことである。

調理台の上はいろいろな食材で一杯だった。

総書記はそれを眺めながら満足げに言った。

「食材がたくさんありますね」

そして、兵士たちが中隊を懐かしいわが家と思うようにするためには、彼らに暖かい寝室と盛り沢山な食卓を提供しなければならない、私は人民軍の部隊や区分隊を視察する際、兵士たちの寝室が暖かく、調理場に食材が一杯あるのを見る時が一番嬉しいとし、寝室が暖かく、食卓が盛り沢山な区分隊は例外なく、指揮官が中隊を軍人たちの懐かしいわが家のようにつくるという党の要求を思想的に受け止め、軍人たちのために懸命に努力する区分隊であると言った。

続けてこう強調した。

「党が指揮官を信じて貴い兵士たちを任せたのだか

ら、彼らの生活によく気を配らなければなりません」
　貴い兵士たち……。
　もう数回も口にした言葉である。
　区分隊の指揮官に、軍人たちの生活をよく見守るべきだと強調した懇切な言葉は、全軍の指揮官への要求でもあった。
　金正恩総書記は再び区分隊の指揮官に強調した。
「指揮官は兵士のためのよいことをどうすれば一つでも多くするかということに常に頭を働かせなければなりません。兵士たちのためにはよいことを多くすればするほどよいのです」

五 聖 山

　いつか金正恩総書記は、ある人民軍部隊の責任幹部に会った席で、自分が五聖山（オソン）に登った時のことを振り返ってこう言った。
　——五聖山陣地の軍人たちに会いたい。今も別れを惜しんで涙ぐんで私を見送っていた彼らの姿が目にまざまざと浮かんでくる。……
　金正恩総書記が五聖山に登ったのは2013年6月である。

指揮所に上って部隊の指揮官たちの挨拶を受けた総書記は、1998年の8月と11月に2回にわたって五聖山に登った金正日国防委員長の先軍指導業績を伝えるために建てた現地指導標識碑の前に足を運んだ。

碑の文字を読み終えた総書記は、随員たちに、五聖山は金正日同志の先軍指導業績を長く伝える大露天革命史跡だと言える、五聖山への道は本当に険しくて急傾斜だ、金正日同志が登る時には道が今よりもっと険しかっただろう、と言った。

いつかある外国人は五聖山に登って降りるのが怖くてヘリコプターを呼んでくれと頼んだが、この一つの事実を通じても五聖山に登る道がどれほど険しいかということがよく分かる。

やがて指揮所の野外監視所に上った総書記は、敵情を聞き、敵の憲兵哨所と一番近い哨所はどこか、そこへ行ってみようと言った。

一瞬、指揮官たちは驚き当惑した。

我に返った指揮官たちは、それだけは止めて下さい、分哨所には絶対に出てはいけません、と異口同音に進言した。

すると総書記は、そこは危険極まる所だから私は絶対に行ってはいけないと言っているが、五聖山に来て敵と

銃口を向け合っている軍人たちに会わずに帰れば彼らはたいへん残念に思うだろう、自分はいくら危険な所であっても、カチル峰陣地の分哨所へ出て祖国の前哨を守っている軍人たちに会い、彼らに勝利の信念を与え、敵を恐怖におののかせるつもりだと述べた。

金正恩総書記が分哨所に到着すると、軍人たちはこんな危険な所まで来られた総書記を仰ぎ見、万歳も叫べずにただ涙を流すばかりだった。

敵の有りうる蠢動に対処する準備はできていたが、それでも瞬時も気を緩めてはならない所であった。

哨所の戦闘勤務遂行状況をつぶさに確かめた後、軍人たちと記念写真を撮った総書記は、この写真を必ず故郷の父母たちに送ると約束した。

「この哨所は決して寂しい所ではありません。最高司令官が常に諸君と共にいると考えて下さい」

総書記が哨所を後にする時、軍人たちは涙ぐんで二度とこのような危険な所に来られないようにと願いながら声も出せずに両腕を振った。

総書記は彼らに向かって長い間手を振って応えた。

分哨所を降りて部隊の指揮部を見て歩いた総書記は、随員たちに、今日私が敵との距離が350メートルしかならないカチル峰陣地の分哨所へ行きたいと言うと、みな

さんはそこにだけは絶対に行ってはならないと言ったが、私はそのような所で軍務生活をする軍人たちに会わずには、枕を高くして寝ることができないのでそこまで行ってきたと、話した。そして、金正日同志が視察した部隊や陣地はもちろん、金正日同志が訪れていない部隊や陣地がいくら危険な所にあってもみな行ってみるつもりだとし、兵士たちがいて最高司令官もいるのである、と力をこめて語った。

高潔な人柄

電気スタンド

金正恩総書記は同志たちを重視し限りなく愛しているばかりでなく、革命の先輩に対する気高い道義心を生来の品性としている。

ある日、側近の幹部たちは、総書記の執務室にある電気スタンドについて深く考えて相談した。

その電気スタンドは別して明るくもなく、それに使用に便利だと言える程のものでもなかった。

彼らは少し見栄えがする扱いやすい電気スタンドを贈ることにして用意した。

2008年1月、電気スタンドの贈り物を手にした総書記は、みなさんの誠意は有難いが、今後はこんなことをしてはならない、私は今の電気スタンドで十分間に合っている、これはいずれ機会を見て、高齢の革命の先輩に贈ると言った。

思いがけない辞退に、彼らは返す言葉がなかった。

革命の先輩を尊敬し、何か特別な物が手に入ると、まず彼らのことを考える総書記の道義心に今更のような感動を

覚えながらも、夜の執務上不可欠の電気スタンドだけはなんとしても受け取ってもらいたくて、力をこめて勧めた。

「金正恩同志が是非ご使用なさって下さるのは私たちの一致した要望です」

それにもかかわらず総書記は、みなさんの誠意は有難い、しかしこの電気スタンドは明るく、しかも扱いやすいという点からしても高齢の人が卓上に置いて使うのが当然ではなかろうか、われわれは革命の先輩を重んじ、尊敬すべきだ、彼らは金日成同志と金正日同志に従って半生を祖国と人民のために尽くしてきた革命の元老だ、彼らが金日成同志と金正日同志に従って革命に献身しなかったとしたら今の朝鮮について考えることができようか、われわれは革命の第1世代や第2世代のことを決して忘れるべきでない、彼らの党と領袖への無限の忠実性と、祖国と人民に対する高度の献身性を積極的に学ぶべきだ、と語った。

笑いの花咲く生産現場

2011年7月のある日、金正日国防委員長に随行して金正恩総書記は、ある果物総合加工工場を視察した。

果実サイダーの生産場で一幹部が、ベルトコンベヤーに載って次々に送り出されてくるサイダー瓶を指して、このサイダーにはアルコール度が5度であると説明した。

生産中の発酵工程において発生するアルコールのせいで、普通のサイダーとは違って、飲めばビールを飲んだ時のようにほろ酔い機嫌になるという説明に総書記は笑い、工場で生産されるサイダーにアルコール度が5度であるなら、このサイダーを飲んでもお酒を飲んだこととあまり違いがないだろう、と言った。

そして、人々の中にはお酒を飲んでいながらも果実サイダーを飲んだなどととぼける人も出てくることだろうと言って楽しそうに笑った。

幹部たちはおかしそうに笑いさざめいた。

製品の陳列室ではリンゴ酒を見て、アルコール度は何度かと尋ねた。

一幹部がすかさず、30度ですと答えた。

総書記は、あなたがこの酒のアルコール度について詳しいのをみると、恐らく大の辛党のようだねとからかうように言った。

人々はまた一斉に笑いさざめいた。

人民のための果物加工品が流れるように次々と生産さ

れているのが楽しくて、金正恩総書記は始終にこにこしていた。

強調した問題

2012年1月、金正恩総書記は開店を前にしたある商店を視察した。

さまざまの商品が売り場ごとに積まれた店内を見て歩いた総書記は、この商店の建設に際して敷地の選定をはじめなにかと深い関心を向けた金正日国防委員長の労苦と業績について振り返った。

まず家庭用品売り場を見て回り、日用品売り場で「コスモス」ヘアピンを手にして見て、歩みを進めた総書記は、日用品売り場のめがねを見過ごしてしまったが引き返して見ることにしようと言い、めがね陳列台の前に戻った。

各種の色めがねや近視・遠視用のめがねがずらりと差し込まれている陳列台の前でサングラスを引き抜いた時、総書記の目にかすかな陰りが走った。

総書記は随員たちを振り返り、「このめがね陳列台はめがねを取り出してみるのに不便です。めがね陳列

台は回転式になっていれば、お客がめがねを選び取って見るのに便利ではないでしょうか」と言った。
　そして、サングラスをかけて、鏡はどこにあるのかと聞いた。
　店員が急いで嗜好品売り場から鏡を持ってきた。すると総書記は、私が見ようというのではない、めがね売り場には鏡が具備されていなければならない、そうすればお客はめがねをかけて自分の姿を見ることができるわけだと言った。
　めがねの売り場に鏡を具備すべきだということは常識であるはずなのに、そんなことに考えが及ばなかったとして、商店の幹部たちは恥ずかしい思いをした。立派に建てられた商店に満足しながらも、商品を選んで買うお客の便宜について気にもかけていなかったのである。
　筆記具売り場のボールペンを手に取って書いてみた総書記は、お客が書いてみることができるよう白紙を売り場に用意しておくようにと言い、化粧品売り場では香水の匂いを嗅いでみられるよう小さい匙型の紙を忘れず置くようにとも指摘した。
　総書記はこのように店内を見て歩き、商店の幹部たちが考えつかなかったサービス上の不備な点を一つ一つ指摘し、商店はお客に対するサービスをおろそかにせず、

金正日同志の科学者、技術者への恩愛の情がそのまま行き渡るよう努力すべきだと重ね重ね強調した。
　3階の食品売り場に上り、パン・菓子売り場を見ていた総書記は、カートに菓子2箱を載せながら言った。
「パン・菓子売り場の横手に置かれているこのカートは、お客が買う商品を載せて歩くものなのでしょう。私も菓子をこれに載せて行くことにしましょう。私がこの菓子を買ったからとして、これが最上等菓子だと思ってはなりません」
　総書記のジョークに随行の幹部たちはどっと笑った。
　しかし彼らは、総書記がカートに商品を載せて陳列場の通路を歩くのに不都合な点はないかどうかを実験していることに思い至り、胸を熱くした。

自ら乗ってみた慣性飛行車

　金正恩総書記は金正日国防委員長に随行して竣工を前にした凱旋（ケソン）青年公園遊戯場を視察した。
　そこでは遊戯機械の安全性を確かめる試運転が行われていた。
　遊戯機械を見て歩いていた金正日国防委員長が慣性

飛行車の前で、人々が安心して乗れるようにするためにはまず幹部たちが先に乗ってみるべきだ、今日ここへ来た幹部たちはみな慣性飛行車に乗ってみることだと言うと、金正恩総書記は幹部たちと共に乗車口に向かった。

遊戯場の幹部たちが危険だからと何度も引き止めたが、総書記はわれわれの人民が乗るものではないか、だから私が先に乗ってみる必要がある、として真っ先に慣性飛行車に乗った。

そして、幹部たちを安心させるべく楽しそうな口調で一つ宇宙旅行をしてみるかと言い、慣性飛行車に乗り操縦桿を握って、こんな時に勇敢にならなくていつ勇敢になれようか、と豪快に笑った。

ほかならぬ人民が乗って楽しむ遊戯機械であるからと、その安全性を自ら確認すべく飛行車の操縦桿を握る金正恩総書記！

父なる愛を大声で人々に伝えようとでもするかのように、慣性飛行車は轟音を立てて矢のように空中の軌道を走った。

勤労者たちと同じ座席

金日成主席の生誕100周年を民族最大の慶事として意義深く迎えるために全国の軍民が奮い立っていた2012年の4月、金正恩総書記は落成を控えた人民劇場を視察した。

劇場の各処をゆっくりと見て歩いた総書記は、新世紀にふさわしく立派に建てられた人民劇場は、金日成同志の生誕100周年を迎えた人民に贈る朝鮮労働党の贈り物である、人民のために生涯をささげた金正日同志が劇場をご覧になったらどんなにお喜びになったであろうかと語り、世界のどこへ出しても見劣りしないほどの文化芸術の大殿堂をわずか1年足らずの間に立派に建てた軍人建設者たちの功労を高く評価した。そして、劇場を本当に素晴らしく建てた、すべてが最高の最高、満点中の満点だと激賞した。

総書記のこの称賛に、幹部たちは喜びにどよめいた。

この時、観覧席の中央に目を凝らした総書記は、にわかに慎重な面持ちになった。

中央観覧席は、総書記のために特別に力をこめてしつらえた座席であった。

総書記は随員たちを見回し、金正日同志は生前、どのような特典や特恵も望まなかった、自分も今にこの劇場で行われる公演を見に来る時は、人民たちと同じ座席に座って公演を見る、と言った。

総書記が特典・特恵を嫌うことを知らぬわけではなかったが、中央観覧席までなくすわけにはいかないではという思いで、随員たちは当惑した。

従前の慣例からしても、劇場に中央観覧席を設けるのは当然であった。

総書記はそうした彼らの心の内を見透かしているかのように、中央観覧席をなくすようにと念を押した。

その後のある日、金正恩総書記は人民劇場で勤労者たちと共に公演を観覧したが、その時の総書記の座席は、一般観覧席の第4列第28番であった。

強盛院で

2012年5月、金正恩総書記は近代的な文化・厚生施設である強盛院（カンソン）の体育館を見て回った。

労働者たちの厚生条件が最高の水準で整っていることにすこぶる満足した金正恩総書記は、強盛院の従業員

たちと一緒に記念写真を撮ることにした。
このまたとない朗報に強盛院の従業員たちは大喜びした。
「万歳！」を叫びながら廊下に飛び出し階段を駆け下りてくる従業員たち。
転ぶように走ってくる彼女たちを優しいまなざしで眺めていた総書記は、そんなにあわてて走ったら転ぶ、ゆっくり来るのだと何度も手を上げて制した。
しかし、他人に遅れまいとして走ってきた女性従業員たちは、われ先に総書記の手を取り、腕をつかもうと押し合いへし合いした。
総書記を取り巻いた女性たちはそこから押し出されまいと力を競い合った。
頑是ない子どもたちが駄々をこねるような無作法な行為であった。
けれど総書記はそんなことには構わず、強盛院の女性たちはなんという豪傑たちだろうと言って朗らかに笑った。
慈しみに満ちた総書記の言葉に女性「豪傑」たちは幸福感にあふれて、どっと笑った。

風の音

2012年5月、金正恩総書記は万寿台(マンスデ)地区に新しく建設された倉田(チャンジョン)通りの45階建てのアパートを視察した。

アパートのベランダのガラス窓越しにすっかり様変わりした万寿台地区をしばらく俯瞰していた総書記は、ここから眺めると平壌の景色がまた別の趣に感じられる、おそらく記者たちがわれ先にここに上がってきて撮影したいと言うだろう、とすこぶる満足した。

総書記はふと耳をすましてから、ベランダの窓を少し開け閉めするのであった。

訳を分からずに顔を見合わせる幹部たちに、金正恩総書記は、窓から風の音が聞こえる、ベランダの窓のどこかから風が入ってくるようだ、と言った。

幹部たちが耳をすましてみると、確かに窓の隙間から風の音が聞こえている。

幹部たちを見回していた総書記は、ベランダの窓から外を眺める景色は本当に素晴らしいが、窓の隙間から風の音が聞こえるのは問題だと語った。

実際、幹部たちは風を防ぐための対策を講じ、内側に

今一つの窓があるのだから、住民は別して不便な思いはしないだろう、といい加減に思ったのである。

総書記は自責の念に駆られている幹部たちに再三強調した。

——風の音がする家で人々が暮らすようにしてはならない。窓に隙間風が生ずる欠陥を正す対策を立てることだ。……

こうして倉田通りのすべての住宅では隙間風を防ぐ作業が繰り広げられるようになり、数日後には全国の人々の羨望を浴びる中、数多くの家庭が倉田通りに新居入りした。

ハンガーボード付きベンチ

綾羅(ルンラ)遊泳場の建設がたけなわのある日、金正恩総書記は再び工事場を視察した。

ロッカーがずらりと並ぶ脱衣室で室内を見回していた総書記は、ハンガーボード付きのベンチは人民の用に供するものだから最上のものを備えておくべきだと助言した。

その指摘に、関係幹部たちは数日前のことを思い出した。

その日、遊泳場の建設状況を確かめるべく現地を視察した総書記は、その時もこの脱衣室を見ていた。

関係幹部たちは、脱衣室がこれぐらいなら遜色はないと満足していた。

ところが室内を注意深く見回していた総書記は、ここにハンガーボード付きのベンチを備えておくといいだろうと言い、手帳を取り出して図面を描きながら、このようなハンガーボードの付いた両面ベンチがあれば、利用者たちは背中合わせに座って靴下を履くこともできるし、ハンガーボードに衣服を掛けることもできるので便利であり、それに脱衣室の面積利用度も高めることができるではないかと語った。

一人ひとりの客にとって脱衣室はごく短時間利用するにすぎないが、ロッカーの他にハンガーボード付きのベンチまで備えて、遊泳客の便宜をよりよくはかろうと助言する総書記の懇切な気遣いに幹部たちは大きな感動に包まれたものである。

ところが今日またこの脱衣室を視察し、ハンガーボード付きベンチは最上のものを準備すべきだとして、必要な措置を講じるのであった。

（人民が利用するものなら、この世で一番よいものを！）

人民の利用するすべての所で幸せの笑い声が満ちあふれるようにするために、椅子をはじめ小さな備品でもその形式と品質を最高の水準のものにするよう重ね重ね強調した金正恩総書記。

幹部たちは今一人の人民の指導者を戴いて革命を進めるこの上ない幸福感で胸をふくらませた。

建設の主人

2012年6月、平壌産院乳腺腫瘍研究所の建設現場を訪ねて施工状況を確かめていた金正恩総書記は、一幹部に、建設物は主人が細かいことまで文句を付けるほどその質が上がるものだと笑って言い、あわてずに工事を着実かつ完璧に進めるようにと強調した。

設備についての説明を聞いていた総書記は、ふと、ある最新型設備を用意しているのかと尋ねた。

幹部はもじもじした。その設備は値段があまりにも高くて提起する考えすらできずにいたのである。

彼の気持ちを察した総書記は、自分が必要な設備を提供するために尽力する、なんとしても必ず解決すると言った。

感謝する幹部の言葉に総書記は、院長は私を客のように思っているようだが、私も平壌産院乳腺腫瘍研究所の建設の主人だと言って、明るく笑った。

それから数カ月後の11月、完工した平壌産院乳腺腫瘍研究所を視察した総書記は、施工も申し分なくなされ、高価な先端医療設備も全部揃っているとしてたいそう満足し、乳腺腫瘍研究所は女性のために力を入れて建設するものだから、すべての要素を世界的水準に到達させるべきだとし、わが国の女性のためには何も惜しんではならないと強調した。

祝福を受けた新婚夫婦

一日の仕事を終えて倉田通りの新居に帰った金正淑(キムジョンスク)平壌紡織工場で働く文江順(ムンガンスン)、金赫(キムヒョク)の夫婦は、夢を見る心地であった。

部屋に入った総書記が自分たちの手を優しく取ってくれる時まで、二人は夢のような現実にただ驚くばかりで、挨拶もろくにできなかった。

しっとりとした落ち着きのある部屋を見回した総書記は、居間の壁に掛かっている記念写真を見て、いつ撮っ

たのかと尋ねた。

「2009年7月30日、私たちの工場にいらっしゃった金正日将軍と一緒に撮った写真です」

「軍隊時代に部隊にお越しになった金正日最高司令官同志と一緒に撮った写真です」

二人は総書記に誇らしげにこう答え、写真の中のそれぞれの姿を指した。

記念写真と夫人の労働英雄証書を眺めた総書記は、「君たちは本当に幸せ者だ」と言って朗らかに笑った。

祖国の守りと人民の幸福をはかる創造と戦いを最大の誇り、喜びとし、祖国防衛の場、社会主義強国づくりの重要な持ち場で青春時代を誇り高く送ってきた彼らがこの上なく殊勝に思え、頼もしくもあって、このような高い評価を行ったのである。

総書記は、君たちの父母はこの新居に来てみたのか、テレビの画像はきれいかなどと優しく聞きながら部屋の隅々を見回してその暮らしぶりを見届け、新居入りしたのはいつだったかと尋ねた。

5月22日に結婚式を挙げ、7月2日に入居したという返答に総書記は、二人に祝杯をついでやり、新居入りを祝った。

そして、夫人が身ごもっていることを知り、近頃人々は男の子を欲しがっているようだが、君はどちらを望ん

でいるのかねと主人に尋ねた。
「最初の娘は黄金だと言われています。織工英雄の母親に似た娘を望んでいます」
「それは自分の思い通りにはならないのじゃないかな。きっと男の子が生まれる自信がないからなんだろうな」
総書記の朗らかな笑いに続いて新婚夫婦の楽しそうな笑い声が部屋一杯にあふれた。
総書記は、やがて子どもが生まれたら、倉田通りを通りすぎる際に寄ってみるからねと言った。
「きっとお待ちしています」
笑い、感激、そして涙！
彼ら夫婦は総書記と並んで記念写真を撮った。
慈しみ深い父を前にして新婚の夫婦は、この世のすべての幸福を自分たちが独り占めしている心地であった。

新生児の名付け親

ある日、金正恩総書記は一通の手紙を受け取った。
差し出し人の名を見た総書記は喜んで開封した。
手紙には、1カ月前に生まれたわが子の名付け親になっ

ていただければといういちずな願望がこめられていた。

総書記は同室していた幹部たちに手紙の内容を話して、わが子の名前は親が付けるのが朝鮮民族の習わしではないかと言った。

一幹部が、手紙を出した研究士の母親は金正恩元帥の祝福を受けて息子が結婚式を挙げ、男の子まで授かったとして大喜びし、なんとしても金正恩元帥に孫の名前を付けていただかなければと切望している、とその事情を説明した。

総書記は微笑み、それでは両親に代わってみなさんと一緒に立派な名前を付けてみようと言った。

一同は楽しい思いをしながら各人が思い思いに考えては口々に案を出した。

それらの名前をいちいち聞いてからちょっと考えていた総書記が自分の考えを語った。

——青松（チョンソン）と名付けよう。

やがてその子が育ち、四季青々としている松のように剛健で信念の固いすぐれた人物になれ、という意味をこめて名前を延青松（ヨンチョンソン）としてはどうだろうか。

一同はそれがいい、名前に深い意味がこもっているうえに呼び易く、聞きごたえもあると言って賛成した。

総書記は、しかし生みの親など身内の人たちの気に入

らないとね、私は新生児の名前を付けてみるのが初めてだが、果たして喜ばれるだろうか、と謙遜して言った。
「家族もみな喜ぶことでしょう」
総書記は、それなら私の気持ちも安まる、彼ら家族の反応を待つことにしようと言って一同を見回し、ジョークを飛ばした。
——ちょっと遅きに失したような感がしないでもないが、あなたたちも子どもをもう一人ずつ生んで私に名付け親になってくれと頼むといい。
喜んで聞き入れましょう。
どっと爆笑が起こり、総書記も呵々大笑した。

つくり直した座り台

ある日、ヘルスセンター清流院(チョンリュ)の建設現場を訪れ、雄壮華麗な姿を現しつつある清流院の外観を眺めた金正恩総書記は、実に素晴らしいと言って満足の意を表した。
そのあとホールを見て歩き、さまざまの石材を組み合わせて装飾した壁が見た目にも気持ちがよく、なかなか特色があると称え、ついで大衆浴場に入ってみた。
総書記はある浴槽の前で、浴客が浴槽内に出入りする

のに便利なように設けてある手すりをつかんで浴槽内の座り台に目を凝らし、ここへ座ればひょっとして傷をつける恐れがある、座り台の角をなくさなければと言った。

関係幹部たちは自分たちの注意が行き届かなかったことを省みた。

実際これまで浴槽内の座り台は角を立てて設けるのを通例とし、そのことのために座った人が傷をつけるなどとは全然考えてもいなかったのである。

総書記の言葉に幹部たちは、人民のためにいささかの落ち度もなく忠実に働かなければという決意を新たに固めた。

必ずあるべき場

大同江（テドン）の岸辺に素晴らしい屋外スケートリンクが建設された。

勤労者や青少年・学生の体力を鍛錬し、国の氷上スポーツ水準の向上に大いに役立つ清流人民屋外スケートリンク。

名称そのものに朝鮮の社会制度の人民的性格がはっきりと表現されているこの清流人民屋外スケートリンク

は、朝鮮労働党の人民への今一つの贈り物で、最新アイススケート設備と立派なサービス施設の完備した大衆スポーツ施設である。

軽快かつ大きな波模様を表現したユニークな屋根、真夏の酷暑にも氷解することのない広々とした楕円形のリンク、スケートの貸し出し所、待ち合い兼休憩室、医務室、放送室、監視室などのサービス施設が完備している屋外スケートリンクでは、勤労者や青少年・学生たちが喜びにあふれて楽しそうに銀盤上を滑っている。

人民のこうした喜びを実現すべく、金正恩総書記が傾けた恩情はいかに大きかったろうか。

実際清流人民屋外スケートリンクのどの場所、どの器材や設備にも総書記の熱い愛情と細心な心遣いがこもっているのである。

清流人民屋外スケートリンクの建設が最終段階に至っていたある日、ここを訪ねた総書記は、広々としたスケートホールに入り、さまざまな氷上スポーツを楽しむ人民の幸せな姿を思い描くかのように明るい微笑を浮かべてホール内を長らく見回した。

愛するわが人民によろずの幸をめぐらすべく常に心を砕き、近代的な大衆スケート場の建設を直接発起し、あれほど完工を心待ちにしていた金正日国防委員長にこ

こを見てもらえたらどんなによかったろうか。

金正日国防委員長の人民への熱烈な愛を銀盤の上にも開花させたいとおもんぱかる金正恩総書記であった。

この日、建設現場の各所を見て歩きながら、不備な点はないか、人々に不便を覚えさせるようなことはなかろうかとこまごまと気を配っていた金正恩総書記は、ふと、ここにスケートの刃を研ぐ場はあるのか、と尋ねた。

誰も即座に答えることはできなかった。

実際、この屋外スケートリンクは世界に誇るに足る、立派なサービス施設を完備していると自負していた彼らであった。

ところが彼らはスケートの刃を研ぐ場のことはついぞ考えていなかったのである。

彼らの気持ちを察した総書記は、ここは大衆スケート場であるのだから、スケートを貸し出す場もきちんと具備し、スケートの刃を研ぐ場も必ずなければならないと言った。

スケートリンクでスケートの刃を研ぐサービスも提供していれば、スケートを途中でやめることなく楽しく利用できるはずである。

人民が実質的に不便なく利用しうるサービス施設、それが金正恩総書記が望む、国のすべての創造物に必ずあるべき場なのであった。

労働者宮殿

2013年10月、金正淑平壌紡織工場を視察した金正恩総書記は、今この工場の従業員の寮と住宅が不足しているとし、生産の正常化も重要だが、基本は労働者の生活上の不便を解決することだと慎重な口調で言った。

そして、工場の各所を見て回りながらも、この工場の従業員の寮と住宅を建設する問題はこれ以上延ばすことができない、自分が工場の寮と住宅を立派に建設してあげよう、と述べた。

工場の視察が終わった後には、寮の敷地に行ってみなくては、正確なイメージを持って寮の建設に関する手配をすることができないばかりか、ここを離れられそうもないと言って寮の予定地に歩みを移した。

敷地の周辺を見回した総書記は、寮の敷地としてはここがうってつけの場所だ、人民軍部隊の強力な建設陣を投入して速やかに工事に着工させ、来年には完工するようにしよう、来年にどんなことが提起されるか分からないから、寮の建設を一気にやり遂げなければならない、と強調した。

そうして、あらゆる便益サービス施設が十分に整えられた金正淑平壌紡織工場の労働者寮が立ち上がったのである。

2014年4月、完工なった労働者寮を訪れた総書記は、人民軍軍人が金正淑平壌紡織工場の寮生のために立派なすみかを建設したのだから、みな一緒に労働者寮を見て回ることにしようと言って建設工事の細部に至るまで深い関心を払った。

総書記は、内壁を女性の好みに合わせて淡く穏やかな色合いでよく仕上げた、金正淑平壌紡織工場の労働者寮を立派に建設してあげたのだから、後で彼女らにその代価を払わせると楽しげに笑いながら言った。そして、寮のある部屋に入って居間に鏡が掛かっているのを見ては、娘たちが外出や恋人に会いに行くときに鏡の前で身だしなみを整えながらさぞ喜ぶだろうと満足の意を表した 。

この日、総書記はこの寮は労働者寮ではなく、労働者ホテル、労働者宮殿だと言える、外国人にこの寮を参観させても遜色がないだろう、たぶんこの寮を見ると朝鮮は本当に労働者階級の世だと感嘆するだろう、と言った。

うってつけの場所

2014年1月、国家科学院を現地指導した金正恩総書記は、その足で科学者休養所の敷地を確定すべく延豊（ヨンプン）湖へ向かった。

湖畔に到着して周辺の風致を眺めていた総書記は、今日、国家科学院院長を連れて来たのは科学者休養所の敷地を見せるためだとし、この場所が気に入るのかと尋ねた。

そして、昨年の夏に二度も船に乗って湖の岸を見て回り、この場所を選んだと言った。

総書記は、手にした休養所の形成案と敷地を見比べながら、休養所としてはうってつけの場所だ、夏に来てみた時は空気が澄み、樹木が青々と茂り、美しい景色だった、今日来て見ると、冬の風景もそれに劣らず素晴らしいと大いに満足した。

——科学者に十分な休息条件を提供すれば、彼らは科学研究活動でさらなる成果を収めるだろう、それで、党は金日成同志と金正日同志の指導業績がこもっており、景色のよい延豊湖畔に最上級の科学者休養所を建設することを決心した、科学者のためのものはすべて最高

の水準で提供しなければならない。……

そして、科学者休養所をこの世にまたとないものとして立派に建設しよう、われわれは何を一つするにしても最高のものをつくり出さなければならない、数カ月後にはここがすっかり様変わりするだろう、と語った。

こうして、風光明媚な場所に延豊科学者休養所が建設されて科学者に与えられたのである。

最も貴重な財宝

2015年8月末、朝鮮の都市羅先（ラソン）市は思いもよらぬ急激な豪雨に襲われた。

多くの住宅は見る影もなく、鉄道の路盤は沈下し、通信ケーブルはずたずたになって羅先市内の通信は杜絶し、水道も断水した。

市民たちは思いもよらぬ人命や家財の大被害を前にして、呆然自失した。

羅先市の水害に関する報告を受けた金正恩総書記は、即刻羅先市の幹部たちに、破壊された家屋と道路、鉄道、電力や通信網を早急に復旧し、水害を一日も早く癒す対策を立てるよう指示した。

そして、党中央軍事委員会拡大会議で、人民軍が羅先市水害の復興建設を担当して党創立記念日の10月10日以前に完了せよとの朝鮮人民軍最高司令官命令を下した。

総書記の命令を受けた人民軍将兵は即時出動し、全国が羅先市水害の復興建設の支援に奮い立った。

水害復興がたけなわの9月のある日、建設現場を視察した総書記は一幹部から一つの出来事についての報告を受けた。

一部の住民が、家屋を失った人たちのために元の家よりもはるかに立派な住宅を建ててくれるという話を伝え聞き、ただわが欲望を先立たせた行動に走ったというのである。

報告を受けた総書記は、それを問題視してはなりません、彼らがわが党を信頼していなかったとしたら、あえてそんなことはできなかったでしょう、わが党に対する人民のその信頼こそわれわれには何よりも大切です、財宝の中でも最も貴重な財宝は人民の信頼です、と語った。

周辺の人々は言うまでもなく、過ちを犯した当事者らも無分別に行動した自分を責めていたが、総書記は彼らに大いなる愛と信頼を寄せたのである。

同年10月、完工なった住宅を見て回り、わずか30数日

にして今一つの仙境村が生まれたとすこぶる満足し、わが家を失い野外に投げ出されていた被災地の住民に新しい住宅を提供することができて本当に嬉しい、新居入りする人民はどんなに喜ぶことだろうと語る総書記を仰いで、人民は熱い感謝の涙を流した。

青年が地球を持ち上げるなら

2016年4月、完工を間近にした白頭山英雄青年第3号発電所を視察した金正恩総書記は随員たちに、展望台にある第3号発電所建設の着工当時の全景写真と比べてみるとこの地区がすっかり変貌した、当時の面影はどこにもない、と述べた。

そして、第3号発電所のダムのそばに「党が決心すればわれわれは実行する！」というスローガンがあるが、青年突撃隊員と建設者は最も厳しい条件の下でも白頭山英雄青年第3号発電所の建設を党の意図通りに立派に完成して、党の決心は即ち現実であり、実践であるということを今一度全世界に力強く誇示した、と喜ばしげに語った。

この日、総書記は白頭山英雄青年発電所の建設場連合指揮部で準備した文学作品集や素描作品集、写真集、視

覚宣伝物写真集を見た。

青年の発電所建設過程を収録した写真と、その日々に創作された文学作品や素描作品、視覚宣伝物写真を見る総書記の眼には明るい微笑が漂っていた。

そして一幹部に、視覚宣伝物写真集にある「元帥様の信頼さえあればわれわれは地球も持ち上げる！」が印象に残ると語った。

この時、青年同盟中央委員会の幹部が総書記に報告した。

「白頭山英雄青年突撃隊員たちは北方の酷寒の中でも、金正恩元帥の信頼さえあれば地球も持ち上げるという信念と胆力をもって第3号発電所を建設しました」

すると総書記は、白頭山英雄青年突撃隊員たちが私の信頼さえあれば地球も持ち上げるという信念をもって第3号発電所を完工したとのことだが、こんな青年がいさえすれば占領できない要塞はないとし、こう語を継いだ。

「青年が地球を持ち上げるなら、私はその地球を回します」

幹部たちに先にやらせた理由

2019年10月、新たに建設された陽徳(ヤンドク)温泉文化休養地を訪れ、大衆温泉浴場を見て回った金正恩総書記は、同行した幹部たちに浴場に一度入ってみるようにと言った。

そして、顔を見合わせる幹部たちに早く入ってみるようにと再び促した。

一度温泉に浸かってみたいと思っていた幹部たちは、訳も分からず笑いさざめきながら浴場に入った。

そして総書記に、本当に気分がよいと異口同音に言った。

総書記は喜ぶ幹部たちに、浴槽の温度は適当なのか、不便な点はないのか、その程度なら結構なのかと尋ねた。

幹部たちは浮かれ気分でただ素晴らしいと答えるばかりだった。

すると総書記は、人民への贈物という見地に立って意見を出すべきだと指摘した。

総書記の話を聞いて、幹部たちは自分らを先に温泉に

入らせた総書記の意図に気づいたのである。

総書記はある浴槽を指差して、あれを見なさい、浴槽に座った時、水が胸まで浸かってはいけない、浴槽を高めて水が首まで浸かって人民が風邪を引かないようにすべきだ、そして、浴槽に入る時には滑って転ぶようなことがないように安全用欄干も設置しなければならないと強調した。

全国人民の大きな関心の中で陽徳温泉文化休養地のテープカットをしたその日にも、総書記は温泉浴を楽しむ人民に、不便な点は何であり残念に思うのは何かと温かい微笑を浮かべて一つ一つ尋ねた。

実に、陽徳温泉文化休養地は金正恩総書記の人民への気高い愛によってもたらされた人民の建築物である。

人民の幸せなすみか

2021年3月、普通門周辺の川岸地区を視察した金正恩総書記は、普通江畔に沿って立派な段々式住宅地区を形成し、党と国家のために献身している各部門の労働革新者、功労者をはじめとする勤労者に贈ろうとしていると語った。

総書記はふと、ここには金日成同志が利用していた屋敷がある、われわれはその区域に公共建築ではなく、人民の住む住宅を建てようとする、そうするのがまさにわが党の政策であると述べた。

そして、金日成同志の自宅を撤去してその区域に近代的な段々式住宅を建て、人民に与えようとすることを知ったら、きっと金日成同志も喜ぶだろう、自分は金日成同志がわれわれのためにわざとこんな素晴らしい場所を取って置いたのではないかという気がすると切々と語った。

2022年4月、普通江川岸段々式住宅区はこのように人民の幸せなすみかに建設され、落成の日を迎えた。

この日総書記は、結局ここで撤去されたのは金日成同志の自宅しかない、今日、金日成同志が自宅の庭の中に愛国者、功労者の幸せなすみかが建てられたことを知ったら満足するだろう、一生涯愛してきた人民を温かい懐に抱いているようでとても喜ぶだろう、と言って、新居の住人たちを祝った。

未来を愛せよ

一緒に過ごした旧正月

2012年1月24日は旧正月（ソルミョンジョル）の日である。

万景台革命学院の生徒たちは毎年旧正月を楽しい祝日としてにぎやかに過ごしていたが、本年のこの日は金正日国防委員長の逝去間もない頃で、院内は悲痛な雰囲気に包まれていた。院児たちは沈痛な面持ちで無為に時間を送っていた。

そんな時、思いもかけず金正恩総書記が旧正月を迎えた学院を訪問するという知らせが届いた。

吉報に驚き歓喜した学院の教職員や生徒たちは堰を切ったような勢いで運動場にあふれ出た。

待つほどもなく学院に到着し、彼らの歓呼の声に迎えられ、挨拶を受けた総書記は、旧正月を迎えたみなさんをお祝いする、万景台革命学院の生徒たちに会いたくてやって来たとして、学院の幹部たちにこう語った。

「私は旧正月の期間、訪問すべき所が多いが、金正日同志を思い気が沈んで寂しく過ごすであろう

生徒たちのことを思って、学院から先に訪ねることにした。今日は金正日同志の逝去後最初に迎える旧正月だから、私が生徒たちの親代わりになって一緒に祝日を過ごすべきで、他の誰がみなさんと一緒に過ごせようか」

「万歳！」「お父さん！」生徒たちは涙に頬を濡らし足を踏み鳴らしながら歓呼した。金正恩総書記を前にして生徒たちはいつまでも歓声を上げ、感激の涙を止むことなく流した。

総書記は、歓呼の声を上げている生徒たちに向かって手を振り、やがて一人の生徒の顔を両手で包み、涙も拭ってやりながら寒くないかと尋ねた。そんな様子を見てみな慈しみ深い父親のような思いやりに感極まり、またまた万歳の歓声を上げげた。

天のように信頼し慕っていた金正日国防委員長を亡くして旧正月を迎える全国の子どもたちと人民の涙を拭い、悲しみを和らげようと努めているかのように、総書記は続けて一人また一人と生徒たちの涙を拭き取り、この寒い日に手がこごえてはいないかと温かく両手を包みもした。

そして、子どもたちの手がとても冷たい、金日成同志と金正日同志がそんなにも愛していた生徒たちの手ではないか、そんな手をこごえさせてはいけない、みん

な早く手袋をはめるようにしなさいと言った。
その言葉に生徒たちは一層熱い涙を流した。
涙はそれを拭ってくれる人の前ではもっともっと流れ出るものであろうか！
生徒たちは金正恩総書記の温かい手を通じて、雪がこんこんと降る日に学院を訪れて自分らをわが胸に抱いてくれた金正日国防委員長の慈しみ深い愛をそっくりそのまま受け、旧正月はとこしえに幸福の祝日、希望の祝日になるであろうと確信した。

慶上幼稚園で

引き受けた課題

倉田通りに新築された慶上（キョンサン）幼稚園を訪れた金正恩総書記は子どもたちの部屋に案内された。
夏の盛りで、室内は非常に蒸し暑かった。
総書記は室温はどれくらいになるのかと尋ねた。
それに答えた園長が総書記に近づいて、夏の蒸し暑い日や冬の寒い日には温度を調節することに難渋していると静かに言った。
総書記は、うん、冷暖房装置をなんとかしてくれとい

うことだろうと言って笑った。

そして、部屋の湿度を下げるにはどんな対策を取っているのか、室内の温度を一定に保つには冷暖房装置がどうしても必要だ、園長が私を頼りにして室温問題を持ち出したからには、私が引き取ってなんとかしなければならんだろう、私が責任を持って解決してあげることにしようと言った。

総書記は随行の幹部たちに、園長が極めて重要な問題を小声で持ち出したのをみるとなかなかのやり手だと言って笑った。みんなどっと笑った。

総書記は園長を力づけるかのように、わが職務に忠実な、責任感の強い人だからこそ私にじかに室温問題を申し出たのだろう、幹部たちはこの園長のように、わが職務をあくまでもやり遂げずにはおかないという活動作風を身に付けなければならないと力をこめて言った。

改修された運動場

金正恩総書記が慶上幼稚園を視察したというニュースが伝わった時のこと。

感動的な出来事のあったその慶上幼稚園を一度見たいとして訪れた人たちは思いがけない光景に出会った。

建設者たちが舗装したばかりの素晴らしい運動場を掘

り返していたのである。

（おやっ、こんな立派な運動場をどうして……）

幼稚園の子どもたちの年齢と心理的特性に即してつくられた広くてすっきりした運動場をどうしてまた掘り返しているのだろうと不審に思っていた人たちは、幼稚園の先生から次のような感動的な話を聞かされた。

2012年5月のある日。

その日は初夏を前にして平壌地方の天気は大変暑かった。

強い日差しを受けて幼稚園の運動場に立っている金正恩総書記を、随員たちは早く涼しい部屋に案内しようとした。

ところで、足を踏み出した総書記が運動場に目を凝らし、眉をひそめたのである。

（どうしたのだろうか）

ピッチをもってさっぱりと舗装されている運動場の周辺には幾つかの遊戯器材が立っていた。

総書記は、慶上幼稚園の運動場を全面ピッチで舗装してあるが、子どもたちの遊戯場まで舗装したのはよくない、遊戯場の地面には砂を敷くか、芝生をつくるべきだ、子どもたちがピッチで舗装した遊戯場でぶらんこに乗って落ちたら傷がつかないとも限らない、と言った。

そして幼稚園の建設を担当している関係幹部に「慶上

幼稚園の遊戯場に砂を敷くか芝生をつくるか、子どもたちが傷つかないようにしなければなりません」と強調した。

総書記の注意を聞いて幹部たちは自分たちのミスに気づいた。やんちゃ盛りの子どもたちが夢中になって駆け回る幼稚園の運動場をピッチできれいに舗装したことで満足し、それに雨天の日も子どもたちの履物に泥がつかなくなったとして喜んでいたのである。

けれども人一倍思いやりの深い金正恩総書記は、幼稚園に足を踏み入れた途端に運動場のこのささいな不備をも見過ごさなかったのであった。

いかに多くの資材や労力を投入し、きれいに舗装したものであっても、子どもたちの遊びに支障があると見なされたら、必ず直さなければならないというのが総書記の意志であった。

こうして建設者たちは、その夜のうちにピッチの舗装を掘り返して地面にゴム板を敷き、さらに遊戯場に緑地を造成して、子どもたちが心ゆくまで遊び戯れるようにした。

変わったものは運動場だけではなかった。

金正恩総書記から贈られたいろいろな遊戯器具に乗り、つくり直された運動場で楽しく遊び戯れる園児たちの姿は人々の気持ちをなごませた。

児童百貨店が伝える話

新設の店内遊戯場

倉田通りの建設に伴って改修された平壌児童百貨店にやって来る子どもたちや勤労者は、誰もがユニークな造りの店内遊戯場で楽しいひとときを過ごしている。

この店内遊戯場にも金正恩総書記の恩情がこもっている。

2015年5月某日、新装の平壌児童百貨店を視察した金正恩総書記は、百貨店の内部が非常に広いとし、売り場のほかに子どもたちのための店内遊戯場を設けるべきだと言った。

総書記は、大人たちが店内で買い物をしている間、子どもたちが遊戯場で遊んだり絵本などを読んだりして時間を過ごせるようにするとよい、それは子どもたちの知能の啓発にも役立つだろうと説明した。

総書記の慈しみ深いこの言葉に、幹部と従業員たちは胸を熱くした。

その後、金正恩総書記は開店を前にした平壌児童百貨店に、児童車、滑り台、きのこ舎、児童鉄道トンネ

ル、動物模型の揺り車、ヤシ島遊び場など28種2296点の室内遊戯用器材を贈った。

子どもを一番大事にする総書記の愛情と配慮によって新設された店内遊戯場、そこで心ゆくまで遊び戯れる子どもの姿、実にそれは金正恩総書記の次世代への愛情によって生まれた今一つの幸せな光景であった。

足手をつかまれた気分

今日、首都平壌の風光明媚な所に改築された平壌児童百貨店には大勢の子どもや人民がやって来ている。

さまざまな玩具が揃っているそれぞれの売り場で子どもに与える商品を手にして喜ぶ父母たち、各階ごとに設けられた店内遊戯場で時間が経つのも忘れて楽しく遊び戯れる子どもたち……。

金正恩総書記が平壌児童百貨店を視察した時、一番気を配ったことは子どもの玩具の問題であった。

百貨店の一幹部から、百貨店に他の商品は多く入荷しているが、まだ玩具は一つも入っていないという報告を聞いた総書記は、慎重な口調で語った。

「今、平壌児童百貨店に多くの商品が送り届けられていますが、玩具は一つも入っていないとのことですから、玩具が問題となります」

何かを深く考えながら2階の売り場を見て3階の階段を上がっていた総書記は、ふと随員たちに、玩具総合工場の輸入に力を入れなければならない、その工場を輸入して生産を始めれば、玩具の問題を解決することができる、と言った。

この言葉に百貨店の幹部は、欲気を起こして、玩具工場が設けられればそこで生産される玩具は全部児童百貨店に送ってほしいと願い出た。

すると総書記は明るく微笑を浮かべて、その工場の玩具を全部この百貨店に送ることにすると快諾した。

百貨店の幹部たちはみな大喜びし、総書記が玩具を送ってくださる日を待っていますと口を揃えて言った。

総書記は、今日児童百貨店に来てここの人たちに足手をつかまれた気分になったと言って豪快に笑った。

百貨店の幹部はもちろん、みながどっと笑い出した。

そして、次世代に尽くす総書記の恩情に深く感動した。

厳しく指摘された形式主義

2012年７月初め、金正恩総書記は再び平壌児童百貨店を視察した。スポーツ器材の売り場には卓球ラケットの玩具があった。

その小さいラケットを手に取ってしばらく眺めていた

総書記は、このラケットに合うボールは用意されていないが、子どもたちはエンドウ豆をもって卓球をするしかないだろう、これこそ形式主義ではないかと厳しく指摘した。

関係幹部たちは頭を上げることができなかった。

ただの児童用の玩具にすぎないので、小さくても見栄えさえすればそれまでだとして、玩具が子どもたちの知能の啓発に役立つようにつくられることについては全然関心を払っていなかった彼らであった。

総書記は、われわれはこんな形式主義を必ず一掃しなければならない、何かを一つつくっても実用的で完璧なものにつくらなければならない、わが国でも早く最新式の知能玩具工場を建て、子どもたちに多くのすぐれた玩具が行き渡るようにすべきだと言った。

そして、知能玩具の大量生産がなされるまで当百貨店にジグソーパズルその他の知能玩具を送ることにすると語った。

子どもたちの知能を啓発するためには、小さな玩具に見られる形式主義的な要素も決して見過ごすべきでないとし、知能玩具を送る措置まで講ずる金正恩総書記は、まことに朝鮮の子どもたちの慈しみ深い父である。

大会の席上で新生児の名付け親に

2014年4月、金正恩総書記の臨席の下に開かれた朝鮮人民軍第1回航空兵大会は議事日程を順調に終えて閉会を宣した。

席から立ち上がって大会の参加者の歓呼に手を振って答礼していた総書記は、そのまま自席に腰を下ろした。

何事かと緊張している大会参加者に向かって総書記は口を開いた。みなさんと一つ相談したいことがある、実は先日、某飛行部隊を視察した際、一女性航空兵の新生児の名付け親になろうと約束したのだったが、まだその約束を果たせないでいる、まことに申し訳ない、と。

大会参加者が驚き、当事者らの衝撃はより大きかった。

1カ月前、くだんの飛行部隊を訪れて航空兵たちの飛行訓練を指導した総書記は、夫婦航空兵の家庭ごと別々に写真を撮った。

その時、一女性航空兵は何かもじもじして、すぐにその場を離れようとしなかった。生まれたばかりのわが子の名を付けていただきたいとお願いしたかったが、あえて口には出せず、顔ばかり赤らめていたのである。

そんな様子に部隊の指揮官が総書記に、この女性航空兵は先日男の子を産んだばかりですが、最高司令官同志に名付け親になっていただきたいと願っているようですと口ぞえした。

総書記は随員たちを振り返り、「どうです。この部隊に来ると思いもよらぬことばかり要求されるのだからね」と言って豪快に笑った。そして彼女に向き直り、では少し考えてみて、名を付けて知らせることにしよう、と約束したのであった。

その日、彼ら夫婦の名前まで聞いてから部隊を後にした総書記は、玉流（オンリュ）児童病院を視察した際にもその女性航空兵が息子と一緒に入院していると聞いて、新生児の名付けを常に考えてはいるが、気に入る名前が思いつかなくて困っているとし、必ずよい名前を付けてあげようと言った。

総書記は大会に参加した女性航空兵に子どもの名はまだ付けていないのかと尋ねた。

その質問に彼女は、最高司令官同志が名付け親になってくださるとおっしゃったので、まだ付けていませんと答えた。

総書記は、まだ名前を付けていないならここで付けることにしようと言って、こう続けた。

「お子さんが将来飛行機に乗るかどうかは分からな

いが、航空兵になって祖国の空を守ればよいし、他の職務についても汚れのない良心を持って党に忠誠を尽くし、いちずな愛国心に燃え祖国の繁栄をめざして一生忠誠の一筋道を変わりなく歩めという意味で、名を李忠道（リチュンド）とすればどうだろうかということです」

大会参加者は一斉に立ち上がり、割れんばかりに歓呼した。

竣工のテープカットは子どもたちに

2015年6月、金正恩総書記は院児に贈る新しいすみかをもう一度見るべく、竣工式を間近にした元山（ウォンサン）育児院と元山愛育院を3度目に訪れた。

元山愛育院の建物の正面に掲げられている「われら幸せうたう！」というスローガンを見た総書記は、実に素晴らしいと言って元山育児院と元山愛育院の各所を見て回った。

総書記は、金日成同志と金正日同志が院児たちの住む宮殿のような新しい建物を見たならどんなに喜ぶだろうかとし、両親のいない孤児のために常に気を遣ってこられた金日成同志と金正日同志の念願がもう一つ叶え

られるようになったと述べた。
　そして、元山育児院と元山愛育院を世界に大いに誇るべきだ、このような創造物を見ながら朝鮮式社会主義制度の優越性を感じるべきであり、院児の幸せな姿から喜びを覚えるべきだと強調した。
　総書記は、今日は国際児童デーだから、元山育児院と愛育院の竣工式を早く行って院児を入居させなければならない、竣工式の時には子どもたちにテープカットをさせた方がいいだろう、院児が自分らの住居に引っ越ししながら自分の手で竣工のテープカットをすると、大人になってもいつまでもそれを忘れないだろう、金日成同志と金正日同志もその姿を見れば喜ぶだろうと言った。
　こうして、数日後自分の手で竣工のテープカットをして新居入りする院児たちの幸せに満ちた感動的な光景が元山育児院と元山愛育院に繰り広げられたのである。

自ら定めた評価基準

　2015年11月のある日、平壌幼児食品工場を視察していた総書記は、製品サンプル室に足を運んだ。
　工場で生産された数々の栄養食品サンプルを一つ一

つ注意深く見ていた総書記は、随員を振り返り、これからは製品の多様化を実現しなければならない、生産工程の近代化と製品の分析システムが確立し、製品の栄養学的・衛生学的要求に十分応えうる条件が整っているのだから、より美味な製品をつくるために新しい目標を立てる必要があると強調した。

　そして、子どもたちの口はだませない、子どもの舌以上に鋭敏なものはない、赤子は話すことはできなくても味は区別する、大人なら、食糧事情が厳しいからまずくても食べなくちゃと言われたら承知して食べもするが、幼児の場合はそんな風にはいかない、と指摘した。

　実に、何を評価基準にして目標を定めるべきかという意義深い言葉であった。

金正恩逸話集

執　筆：李尚浩、李英日
編　集：安鉄鋼
翻　訳：金正蓮
発　行：朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
発行日：チュチェ113(2024)年6月

ㄱ-240880181443

E-mail: flph@star-co.net.kp
http://www.korean-books.com.kp

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
チュチェ113(2024)
ISBN 978-9946-0-2279-6